

新增補
版
日本文学史
近代 I

久松潜一
五味智英
池田亀鑑
秋山虔
市古貞次
麻生磯次
吉田精一

増補新版日本文学史 近代Ⅰ

昭和52年4月23日発行

久松潜一編

発行所 至文堂

東京都新宿区弘方町27

東京 (〒60)2211(代)

発行者 佐藤泰三

印刷 誠之印刷株式会社

製本 凸版印刷

序

文学史の研究は、文学研究における到達点であり、これによって全体と有機的に統一づけることができる。日本文学の研究においても、明治以後はそれ以前の注釈を中心としたと異なって、文学史研究が中心的位置を占めてきたが、なお今後にまつところが多い。私自らも日本文学史の研究を一つの課題として多年考察を続けており、これに関する一、二の述作をまとめたことがあるが、個人の研究には限界がある。ことに規模の大きい文学史においては、それぞれの時代の専門分野にわかれてくるので、共同的に扱うことが必要となるのである。

こういう考えのもとに同学とともに先年規模の大きい日本文学史を企画し、各時代文学史をそれぞれ専門とされている方々にこうて執筆していただいた。全体を一つの史観によって貫くというよりも、それぞれの分野における最も正確な叙述によって文学史の基礎をしっかりと立てることが目標であった。そして、多数の人が書いた場合に、相互に有機的な連絡がなく統一のなくなることをないために、私のほかに五味智英・池田亀鑑・市古貞次・麻生磯次・吉田精一の五氏がそれぞれ専門とする時代を分担されて、執筆者とも十分打ち合わせをし、各項が講座風な配列と叙述に終らないように有機的な調整をした。そして、執筆者の深い協力と編集の五氏の献身的な努力とによって、立派な内容の上に全体に統一のとれた文学史となることができたのである。

それから一〇年が過ぎた時、顧みると文学史上の新資料・新見解の現れた点も多く、学界の水準を示すためには増補訂正をなすべき点も生じてきたので、執筆された方々に再びこうて増補訂正を行い、新しく発表された参考文献をも加えた。近代編ではその後の文学的事象を書き加えていただき、年表も数年間の記事を補った。したがって索引を

新たに作成し、口絵写真なども新しくした。ただこの間に、執筆者のうちで池田亀鑑・風巻景次郎・西下経一・秋本吉郎・田辺幸雄・吉原敏雄・佐佐木治綱・杉浦正一郎・宇佐美喜三八・片岡良一氏らが世を去られた。そのために中古編の編集に秋山虔氏を委嘱するとともに、各項目についてもそれぞれ新しく執筆者を依頼して増補訂正を行った。かくして面目を一新した日本文学史六巻が完成したのは昭和三十九年のころであった。

それからさらに、五、六年は過ぎたが、増補訂正版では、増補した部が本文とは別々になっているので、使用の上でも体裁の上でも不便なことが少なくなかった。そこでこのたびは執筆者にこうて増補の部分をも本文に組み入れ、また全面的に書きかえたりして、新版として世に送ることになった。近世・近代はもともと量も多かった上に、近代では書き加える部分も多く、一層量も大きくなったので二冊にわけることにした。また総説年表編の年表も書き加えられ、量も多くなるので、年表編と総説編を別々にすることにした。

このたびの新版では、参考文献をまとめて後に加えることにした。その他、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めた。ただ引用文はもとのままである。

日本文学史の研究は、今後も進展してやまない。本書にしても、文字史の一つの段階を表すものではあろうが、これによって日本文学史研究の現在における大きな礎石としての役割を果たすことはできるであらう。

終りに、この日本文学史のためにそれぞれすぐれた研究成果にもとづいて執筆され、再三にわたって増補もしくは書き改めて下さった方々の協力を心から感謝する。ただ増補訂正版からこのたびの新訂版に至る間に窪田敏夫・田崎治泰氏らが世を去られたためもある。新しく執筆を中西進・犬養廉・島田良二・福田秀一・長谷川強・恩田逸夫・片岡懋氏らに委嘱した。片桐顯智氏は書き改めを完成されたのに世を去られた。この日本文学史の形成と発展にも、種々の世の移り変りが現れていることを今更に感ずるのである。

さらにまた、この文学史をよりよくするために不断に協力を惜しまれなかつた佐藤正叟氏も世を去られて、新たに佐藤泰三氏によってことが進められたことを付記して、感謝の意を表したい。

昭和四十六年四月

久松 潜 一

このたび増補新版を世に送るに当って、学界の進展にともなう若干の増補訂正を行い、年表も昭和五十年までの事項を追補した。また年表編と総説編とを再び一冊にまとめることにした。またその間に喜多義勇・小林智昭・藤川忠治・成瀬正勝・広田栄太郎諸氏が世を去られたのは感慨の深いものがある。

昭和五十年八月

久松 潜 一

目次

概説

時代区分について(一)――近代の時期についての三説(一)――和辻哲郎氏の説
(二)――勝本清一郎氏の説(二)――諸説に対する批判(三)――市民社会(六)――啓
蒙思潮(七)――写実小説(八)――写実の進展(九)――浪漫主義(九)――自然主義
(九)――耽美主義(一〇)――理想主義(二)――理知主義(三)――プロレタリア文
学(三)――芸術派(四)――統制下の文学(五)――戦後の文学(六)

明治の文学

第一章 初期文学

一 近代の成立

戯作文学(三)――翻訳文学(三)――翻訳の文体について(五)――政治小説
(七)――逍遙と小説神髓(三)――当世書生氣質(三)

二 言文一致運動

1 概説

ことばと近代の文章(五)――言文一致の意義(六)

2 発 生 期

第二章 小説

説

一 二十年代

1 写实的傾向

硯友社の成立 (五五) — 山田美妙と言文一致 (五九) — 二葉亭四迷 (五九) — 尾崎紅葉と硯友社 (五九) — 硯友社の作家たち (六四) — 幸田露伴 (六六) — 斎藤緑雨 (七〇) — 樋口一葉 (七〇)

2 浪漫的傾向

女学雑誌 (七四) — 徳富蘇峰と「国民之友」 (七五) — 嵯峨之舎おむろ (七七) — 宮崎湖処子 (七九) — 二十年代のロマンティズム (八〇) — 鷗外の初期三部作について (八二) — 北村透谷 (八三) — 文学界の成立 (八四) — 「文学界」と透谷 (八五) — 星野天知 (八五) — 「文学界」同人の一般的傾向 (八七) — 国木田独步 (八八)

3

発生期の意見と実行 (六六) — 小新聞と談話体 (四四) — 民権運動と談話体 (四二)

四三

4

「かなのくわい」と言文一致 (四三) — 羅馬字会と言文一致 (四三) — 速記文の言文一致促進 (四四) — 言文一致小説家の出現 (四六) — 言文一致小説の流行 (四八)

四六

5

停滯期から第二自覚期
言文一致下火となる (四八) — 言文一致の復活 (四九) — 言文一致体論文の台頭 (五一)

五一

確立期
画期の明治三十三年 (五二) — 写生文と言文一致 (五三) — 自然主義文学運動 (五三)

五三

五五

五五

五五

七四

— 歴史小説 (九〇)

二 三 十 年 代

九一

概観 (九一) — 硯友社系統の作家たち (九二) — 尾崎紅葉と「金色夜叉」 (九三) — 社会小説と社会主義小説 (九四) — 家庭小説 (一〇〇) — 自然主義への方向 (一〇三) — 反自然主義の作家 (一二) — 写生文派 (一二)

三 自 然 主 義

一二四

自然主義の特色 (一二四) — 島崎藤村 (一二七) — 田山花袋 (一二〇) — 徳田秋声 (一三三) — 正宗白鳥 (一三九) — 岩野泡鳴 (一三八) — その他の作品 (一四四)

四 反 自 然 主 義

一二四

1 鏡 花 の 立 場

一二八

自然主義の性格 (一四〇) — 泉鏡花 (一五〇) — 「婦系図」と「歌行灯」 (一五二)

2 漱 石 と そ の 周 辺

一二五

夏目漱石 (一五三) — 前期の作品 (一五五) — 中期の作品 (一五五) — 後期の作品 (一五九) — 漱石文学の第一義 (一六〇) — 高浜虚子 (一六三) — 写生文作家 (一六四) — 鈴木三重吉 (一六五) — 吉村冬彦 (一六五) — 森田草平 (一六六) — 「葉亭四迷」 (一六七)

3 鷗 外 と そ の 周 辺

一二七

森鷗外 (一六五) — キタ・セクスアリス (一六六) — 「雁」「青年」「妄想」など (一七〇) — 鷗外と啄木 (一七三) — 歴史小説 (一七三) — 「スバル」の作家たち (一七四) — 上田敏 (一七五) — 木下李太郎 (一七五)

4 反 自 然 主 義 の 二 潮 流

一二六

耽美派と白樺派 (一七五) — 永井荷風 (一七五) — 開化日本への絶望と江戸趣味 (一八〇)

第三章 評 論

—谷崎潤一郎の登場(二八) —谷崎文学の第一期(二八) —耽美派の周辺(二八)

論 一八六

一 自然主義以前

1 明治初期の文学論 一八六

明治初期の文学観(二八) —啓蒙家の文学観(二八) —政治小説家の文学観(二九)

2 小説神髓 一九三

「小説神髓」の背景(二九) —序説(二九) —史的展開(二九) —小説の本質(二九) —小説の種類(二九) —小説の裨益(二九) —小説の作法(二九) —「小説神髓」の意義(二九)

3 文芸批評の台頭 二〇〇

二葉亭の写実小説論(二〇〇) —森鷗外の文学論(二〇一) —没理想論争(二〇二) —忍月と不知庵(二〇四) —キリスト教的文学論(二〇五) —「文学界」評論(二〇六) —北村透谷とその影響(二〇六)

4 後期浪漫派の評論 二二三

時代の変転(二三) —後期浪漫派の特色(二三) —櫻牛と美的生活論(二四) —櫻牛とニーチェ(二五) —三十年代後半の推移 —神秘思想(二七) —社会主義的思潮の萌芽(二七)

二 自然主義・反自然主義の評論 二二九

1 硯友社系統の写実主義とソライズムの提唱 二二九

小杉天外(二三〇) —永井荷風(二三五)

第四章 詩

一 浪漫古典詩

- 1 概 説 二六四
詩について (二五四) — 詩の変遷 (二六〇) — 文語定形詩 (二七〇)
- 2 新詩文学の誕生 二七四
新体詩の発生 (二七四) — 新体詩抄 (二七五) — 湯浅半月 (二八六) — 山田美妙 (二九〇)
— 落合直文 (二八六) — 中西梅花 (二八六) — 於母影 (二八六)
- 3 抒情詩体の樹立 二八五
詩の三派 (二八五) — 浪漫詩 (二八六) — 文学界 (二八七) — 北村透谷 (二八八) — 擬古派 (二九〇) — 武島羽衣と塩井雨江 (二九〇) — 擬古派の功績 (二九四) — 抒情詩 (二九五)
— 松むし寿々虫 (二九六) — 島崎藤村 (二九七) — 若菜集 (二九八) — 一葉舟・夏草・落梅集 (二九九) — 藤村詩の特色 (二九九)

2 硯友社文学の否定と浪漫主義への反省 二七七

田山花袋 (三〇〇) — 露骨なる描写論 (三〇四) — 長谷川天溪 (三〇六)

3 自然主義文学理論の成立 二四三

島村抱月 (二四三) — 自然主義の価値 (二四六)

4 自然主義評論の分化 二五〇

相馬御風 (二五〇) — 片上天弦 (二五〇) — 岩野泡鳴 (二五三)

5 反自然主義の評論 二五四

非自然主義の人々 (二五三) — 漱石門下の人々 (二五〇) — 耽美派の人々 (二六〇) — 石川啄木 (二六二)

二六四

二六四

二六四

二七四

二八五

4 浪漫詩風の展開……………三〇七

浪漫主義(三〇七) — 土井晩翠(三〇〇) — 天地有情(三〇九) — 晩翠詩の特色(三一二)
 — 薄田泣菫(三三四) — 二十五弦(三三〇) — 白羊宮(三三二) — 蒲原有明(三三五)
 草わかばと独絃哀歌(三三六) — 有明の詩風(三三六) — 訳詩文集(三三〇) — 明星
 (三三〇) — 鉄幹子(三三三) — 林外・泡鳴・御風(三三三) — 明星派(三三三) — 文庫
 派(三三六) — 河井醉茗(三三七) — 横瀬夜雨(三三〇) — 伊良子清白(三四〇) — 孔雀
 船(三四一) — その他の詩人(三四三) — 明星と文庫と(三四四) — 譚詩の流行(三四六)
 — 象徴詩の発生(三四七)

増補訂正……………三四七

新体詩抄の詩論(三四七) — 新体詩抄と於母影の影響(三四八) — 文学界より明
 星へ(三四八) — 海外詩の影響(三四八) — 蒲原有明とロセッティ(三四八)

二 象徴詩以後……………三五二

1 象徴詩の移入……………三五二

象徴主義(三五二) — 象徴詩論争(三五四)

2 上田敏と「海潮音」……………三五五

上田敏(三五五) — 海潮音の序文(三五六) — 海潮音の意義(三五七) — 高踏派の紹
 介(三五八) — 南欧の詩(三五八) — ドイツ抒情詩その他(三五九)

3 蒲原有明と「春鳥集」「有明集」……………三五六

蒲原有明(三五五) — 春鳥集(三五七) — 有明集(三五八)

4 薄田泣菫と「白羊宮」その他……………三七三

薄田泣菫と「白羊宮」その他……………三七三
 白羊宮(三七三) — 岩野泡鳴(三七四)

第五章

短歌

一 近代短歌

5 北原白秋と「邪宗門」「おもひで」その他……………三七四

北原白秋 (三七四) — 邪宗門 (三七五) — 「おもひで」 (三七六) — 東京景物詩其他 (三七六) — 水墨集 (三七六)

6 木下李太郎と「食後の唄」……………三七九

木下李太郎 (三七九) — 荷風の詠詩 (三八〇) — 珊瑚集の内容 (三八二) — 牧羊神 (三八四) — 三木露風 (三八四) — 廃園 (三八五) — 寂しき曙 (三八五) — 白き手の獵人 (三八六)

歌……………三八九

近代短歌とは何か (三八九)

1 沈滞期……………三九一

幕末歌壇の連統期 (三九二)

2 黎明期の和歌文学……………三九三

詩歌文学思想と和歌 (三九三) — 歌楽論 (三九四) — 詠史歌集 (三九五) — 開化新題歌 (三九五)

3 勃興期……………三九七

日本主義の自覚 (三九七) — 長歌改良論とその論争 (三九九) — 国学和歌改良論 (四〇〇) — 国学和歌改良論をめぐる論評 (四〇〇) — 「歌学」の論壇 (四〇〇) — 歌人待望論 (四〇〇) — 詠歌論の流行 (四〇五) — 「新撰歌典」 (四〇六)

4 成立期……………四〇六

落合直文と浅香社 (四〇七) — いかづち会・若菜会・更衣会 (四〇八) — 旧派和歌御歌所派 (四〇九) — 与謝野鉄幹と亡國の音 (四一〇) — 正岡子規の革新論 (四一一)

二 ロマン主義短歌時代……………四二三

1 ロマン主義短歌……………四二三

新詩社と明星（四二三）——明星の發展（四二四）

2 晶子と鉄幹……………四二五

与謝野晶子（四二五）——与謝野鉄幹（四二六）——その他の新詩社歌人（四二七）

3 「叙景詩」の諸歌人……………四二九

叙景詩の運動（四二九）——尾上柴舟（四三〇）——金子薫園（四三一）——太田水穂（四三三）

4 根岸短歌会……………四三三

根岸短歌会（四三三）——伊藤左千夫（四三三）——長塚節（四三四）

三 自然主義短歌の時代……………四三五

1 自然主義短歌……………四三五

自然主義短歌（四三五）——短歌滅亡私論（四三六）

2 自然主義歌人……………四三六

若山牧水（四三六）——前田夕暮（四三七）

3 生活派歌人……………四三九

生活派（四三九）——土岐哀果（四四〇）——石川啄木（四四二）

4 類唐派歌人……………四四三

類唐派（四四三）——吉井勇（四四四）——北原白秋（四四五）

5 写実派歌人……………四四六

アララギ（四四六）——島木赤彦（四四七）——斎藤茂吉（四四七）——中村憲吉（四四八）——

古泉千樫（四四九）

第六章 俳句

一 概観

四四〇

二 子規以前

四四二

月並俳句 (四四二) — 月並俳人 (四四三) — 開化俳諧 (四四三) — 新聞俳句 (四四四) — 「小説神髓」と「新体詩抄」 (四四五)

三 子規の時代

四四六

文学改良運動 (四四六) — 新派俳句 (四四七) — 子規の生涯 (四五〇) — 写生の提唱 (四五三) — 子規と蕪村 (四五三) — 写生主義の限界 (四五四) — 明治の新調 (四五五) — 河東碧梧桐 (四五七) — 新俳句 (四五八) — 春夏秋冬 (五五九) — 高浜虛子 (五六〇) — 日本派の人々 (五六二)

四 子規没後

四六三

続春夏秋冬 (四六三) — 新春夏秋冬 (四六四) — 碧梧桐の「新傾向」 (四六五) — 三里 (四六五) — 乙字の新傾向論 (四六六) — 碧梧桐と乙字の相違 (四六七) — 大須賀乙字 (四六八) — 「新傾向」派の作家 (四六八) — 「新傾向」句の特色 (四七〇) — 日本俳句鈔 (四七二) — 層雲 (四七四) — 井泉水の季題否定 (四七五) — 荻原井泉水 (四七七) — 中塚一碧楼 (四七七) — 自由律俳句 (四七八)

第七章 歌舞伎・新派・新劇

四八〇

一 歌舞伎と新派

四八〇

1 歌舞

四八〇

2	新派	明治の新演劇(四〇〇) — 団・菊・左没後(四〇一) — 歌舞伎台本の新風(四〇二)	四八五
---	----	--	-----

		角藤定憲(四〇三) — 川上音二郎(四〇四) — 伊井蓉峰(四〇五) — 高田実(四〇六) — 新派の全盛時代(四〇七) — 三頭目時代(四〇八)	
--	--	---	--

二 新劇の世界

1	新劇の誕生	新劇の創始(四〇九) — 文芸協会(四一〇) — 小山内薫(四一一) — 自由劇場公演(四一二)	四九〇
---	-------	--	-----

2	展開	新劇の種類(四一三) — 新劇の新段階(四一四) — 芸術座(四一五) — 芸術座の解散(四一六)	四九五
---	----	---	-----

3	発展	大震災以後の展開(四一七) — 築地小劇場(四一八) — 新劇の実験(四一九) — プロレタリア演劇(四二〇) — 小山内のソビエト訪問(四二一) — 小山内の死と築地の分裂(四二二)	五〇〇
---	----	--	-----

	増補訂正	とりで社と踏路社(四二四) — 芸術座の評価(四二五) — 大正期の戯曲時代(四二六) — 築地小劇場と小山内薫(四二七) — プロレタリア演劇(四二八)	五〇六
--	------	---	-----

概 説

時代区分について

日本の近代文学は明治維新以後に置くのが通説である。私もそれに従うのであるが、これに対する異説もある。これについて多少検討したい。

まず根本的な歴史上の時代区画として、古代・中世・近世の三時代にわかつことは、西洋史の常識であり、日本の場合もこれにならったものである。この三分はルネッサンス時代において発し、今日にひきつがれているのであるが、日本の場合は明治以後にさらに近代を立てるところから、問題が錯綜してくる。いま古代、中世については言わないとして（これをはっきり確定するには種々な説がある）、一、近世と近代を一つにして、その中世との区画をどこに置くかという問題、二、近世と近代とを区画するとして、そのけじめをどこに据えるかの問題、この二つが目下さしあたって整理して置かねばならぬ重要な案件である。ということは、それが直ちに中世と近世、あるいは近代社会と近世社会との性格や解釈にひびいてくるからである。

このうち重要なのはことに前の問題である。これについては、(1)中世を江戸時代まで延長して、すなわち鎌倉室町以後明治までをもって中世とみる説、(2)近代を南北朝直後までくりあげて、十四世紀半ばごろ以後とする説、(3)近代を室町末期十六世紀半ばごろより以降とする説の、大ざっぱにわけて三説がある。

近代の時期に 第一の説は最近の歴史家の一部や西尾実氏などに見られるが（岡崎義恵氏はやや立場がちがひ、古代以下の三説を否定し明治以前をすべて中世とみる一説を立てる）、これは明治維新以後を近代とみる我々の立場から